

ハウスマン毒舌録(2)

南條竹則

数年前(一九八四年)、『Hyphen』という同人誌の創刊号に「ハウスマン毒舌録(1)」と題する小稿を載せた。これはローレンス・ハウスマンによる回想記『A.E.H.』から、アルフレッド・エドワード・ハウスマンの毒舌を拾い出して紹介したものであった。筆者は更に彼の毒舌を資料別に拾い集め、続きを書くつもりでいたが、そのうちに『Hyphen』誌が霧消してしまった。此度、本誌に場所を移し、グラント・リチャーズの回想記『Housman:1897-1936』から抜き出した毒言を披露しようと思う。諸賢の論文を読む合間の息抜きにお読みいただければ幸いである。

○リチャード・ル・ガリエンの著書『文学者の宗教 The Religion of a Literary Man』(1893)が上梓された時のハウスマンの^{コメント}評言——
「文盲者の無宗教とどこが違うのか私にはわからん」⁹⁾

○グラント・リチャーズ社から刊行されたジョン・デイヴィドソンの『マモンの勝利 The Triumph of Mammon』(1907)を読んで——
「『マモンの勝利』を送ってくれてどうも有り難う。『The Theatrocra』¹⁰⁾よりも面白かった。でも、この著者は彼の知識が世界を変えると言っているが、その知識なるものは、丁度三位一体の教義のようなものだね——多分間違っている。仮に正しくとも、大した事ではない……」⁹⁾

○ハウスマンがユウェナーリスの校訂本を上梓した時、彼がカトゥルスの校訂本も出すという旨の事を書いた人物がいたらしい。ある書店からグラント・リチャーズに問い合わせがあり、リチャーズが更にハウスマンに問い合わせた。それについて曰く——
「私の才腕——ないし凡手——は、カトゥルス校訂する意図は全然持っていない。だが非国教会派の牧師連中はどんなことでも言うものだ。かれらは人間は信仰によって義とせられると信じているから、そのつもりで好き

放題をするのさ」⁹⁾

カトゥルス云々の噂を誰が言い出したのかについて、グラント・リチャーズはうろおぼえで、あるいはW・ロバートソン・ニコル W. Robertson Nicoll 師が『英国週報 The British Weekly』にそういう記事を書いたのではないかと述べている。ハウスマンはずっと後にリチャーズ宛ての手紙で、クレメント・ショーターがその噂を流したのだと書いているが¹⁰⁾、これは間違いだろう。

○マニリウスの校訂本第二巻の出版の遅れに業を煮やして、グラント・リチャーズに宛てて書いた手紙——
「一月前、君は手紙にこう書いたね——マニリウスの第二巻は錨を上げたという知らせをうけたと。君の情報だと、今船はどこにいるのかね？ 海の底か？ それともヨコハマ経由でロンドンに向かっているのかね？」¹⁰⁾

○画家 Lovat Fraser が書いた『シェロップシャーの若人』の挿し絵を見て——
「……挿し絵画家や、詩を歌詞に使う作曲家の困ったところは、次の点にある。すなわち、連中は自分の芸術と大事な大事な己自身に没入していて、著者なんかは、物を引っ掛ける釘くらいにしか考えていない。しかも、尋常の人間並のセンスと情緒を持ち合わせていないようだ。」

以下に続く作曲家ヴォーン・ウイリアムスへの言葉は有名である。
「……聞くところによると作曲家は時々私の詩を切り刻んでいるそうだ——ヴォーン・ウイリアムスは“僕の馬は耕しているか Is my team ploughing” から二つの聯をカットしたそうだ。もし私が彼の曲から二小節カットしたら、彼はどんな気持ちができるだろう。」¹⁰⁾

これに対しヴォーン・ウイリアムスは、

The goal stands up, the keeper

Stands up to keep the goal.

ゴールは立ち、キーパーは

立ってゴールを守る
 のような拙い行を自分の歌曲から割愛して、後世の記憶
 にとどまらぬようにしてやったのだから、詩人は感謝し
 てしかるべきだ、と述べている。⁹⁹⁾

○『シュロップシャーの若人』をアメリカで出版したい
 という申出に何と返事をすべきか、G・リチャーズに指
 示した手紙——

「ヴィカース氏にも、他のアメリカ人にも、好きなように
 させて結構。アメリカ人は人間だと聞いているから——
 —あまりそうは見えないが」¹⁰⁰⁾

○晩年のジョージ・メレディスについて——

「……彼は今では汚臭を放っている。もうとっくに死ん
 でいるからだ……」¹⁰¹⁾

○ある時、晩餐会で、J・M・バリーとハウスマンが隣の
 席に坐ったが、二人は一晩中一言も口を利かなかった。
 翌日、バリーがハウスマンに手紙を書いた。

「親愛なるハウスマン (Houseman) 教授、

昨晩は隣に坐りながら一言も口を利かず、失礼致しま
 した。何という無礼者かとお思いでしょう。私は本当は
 大変な含羞^{はにか}み屋なのです。

敬具

J・M・バリー」

すぐにハウスマンから返事が来た。

「親愛なるジェイムズ・バリー脚、

昨晩は隣に坐りながら一言も口を利かず、失礼致しま
 した。何という無礼者かとお思いでしょう。私は本当は
 大変な含羞^{はにか}み屋なのです。

敬具

A・E・ハウスマン

追伸——貴方は私の名前の綴りを間違えて事態をいっ
 そう悪くなさいました。」¹⁰²⁾

(1990. 10. 4)

註

(1) See Grant Richards *Housman: 1897-1936* Oxford
 University Press 1941 p. 7. n.

- (2) デイヴィドソンの詩劇。やはりグラント・リ
 チャーズ社から1905年に上梓された。(ちなみに筆者
 の所持本の扉には、With the compliments of the
 Publisher / November 1905 と書き込みがある)
- (3) *Housman: 1897-1936* p. 74.
- (4) *Ibid.* p. 65.
- (5) See Henry Maas ed. *The Letters of A. E. Housman*
 London: Rupert Hart-Davis 1971 p. 144.
- (6) *Housman: 1897-1936* p. 110.
- (7) *Ibid.* p. 181.
- (8) *Ibid.* p. 221.
- (9) *Ibid.* p. 205.
- (10) *Ibid.* p. 342. 但しこれは『A. E. H.』 p. 168からの
 引用である。
- (11) See *Housman: 1897-1936* pp. 384-5. 「ハウスマン」
 の綴りは勿論 Housman が正しい。